

## ジョン・スマイスとトマス・ヘルウィス：恩寵の即興演奏者<sup>(1)</sup>

### マタイによる福音書 10 章 5～22 節

ビル・J. レナード

行って、「天の国は近づいた」と宣べ伝えなさい。〔7. 新共同訳〕<sup>(2)</sup>

バプテストは一軒のパン屋で始まりました。おそらく、それで私たちは（とりわけ南部の類いは）たいいてい、今でもそれを見ると素通りできずに立ち寄ってしまうのでしょうか。世界の歴史で最初のバプテスト教会は、アムステルダムにあった東インド製パン所<sup>(3)</sup>で始まったのでした。小さなグループがこの製パン所で暮らして働いていました。1607年にイングランドからやってきていた人たちで、かの地に吹き荒れる宗教的ディセンター（反国教会派）への迫害を逃れるためでした。彼らのリーダーはジョン・スマイスとって、イングランド国教会を出た分離派の一員でした。イングランド国教会はもはや真のキリストの教会ではないと確信したからです。イングランドにいたとき、スマイスは分離派の別のグループとも交流をもっていました。その中には、1620年、新世界への巡礼者としてメイフラワー号と呼ばれる船に乗り込んだ者たちもいました。

アムステルダムでは、彼らは一時、古代教会と呼ばれる分離派の会衆と集まりを共にしていました。古代教会と言ったのは、教会の人々が新約聖書のみをモデルにしたいと願ったためです。けれども、スマイスと仲間たちはじき、種々の教義をめぐって、この古代教会と袂<sup>たもと</sup>を分かちます。彼らはそのようにして、バプテストにまた一つ、伝統を据えるところとなったのでした。分裂によって増殖を続けるバプテスト、というそれです。スマイスは純粹潔癖な人物で、読み物も讚美歌も、また祈りも説教も、礼拝では印刷物をいっさい用いるべきでないと感じていました。真の礼拝とは全く自発的なもので、心から生まれるものであって、人間の作り物ではないとしたのです。スマイスは、聖書を朗読することさえ、礼拝では良しとしませんでした。英語の翻訳が真正の神の言葉を損なっていると考えたからです。<sup>1</sup>

1609年にはすでに、スマイスはそのちっぽけな一群のもう一人のリーダー、トマス・ヘルウィスと共にこう確信するようになっていました。教会は成人の信仰者のみによって構成されるべきで、それは各人の個人的な信仰告白に基づいてバプテストマを受けた者たちである、と。このゆえに、幼児洗礼はイギリスの分離派の大部分によって維持されたのですが、真の教会では受け入れられないとされました。その同じ年、彼らは後の歩みを決定づける決断をすることになります。彼ら自身の記録<sup>(4)</sup>がその歴史的行為を書き記しています。

「牧師と執事たちはその職務を辞した。教会は解散した。自分たちは教会にあらずと公言したと言ってもよい。そして、全員が肩書きのない個々人として立った、いまだバプテスマを受けざる一人ひとりとして。誰もが平等になったところで、スマイスが、社会的リーダーのヘルウィスが皆にバプテスマを行なうべきだと提案した。だが、ヘルウィスは自身の霊的リーダーに譲歩したのだった」<sup>2</sup>

スマイスはそれゆえ、自らにバプテスマを行ない、続いて、ヘルウィスと他の者たちにバプテスマを施しました。(歴史上)初めてのバプテスト教会が誕生したのです。とはいうものの、どのようにバプテスマをすべきなのか。ちっぽけなその群れはよく分かりませんでした。そこで、彼らの即興演奏です。バプテスマの形式は、3度水を注ぐ灌水かんすいという形。すなわち、水を頭に3回、父と子と聖霊の名において注ぎ掛けたのでした。バプテストは30年以上の間、〔全身を水に浸める〕浸礼しんれいという形式に気づかずにいることになります。

そうこうして間もなくのこと、論争が再び襲いました。スマイスが結局は、(彼らは「セ・バプテスマ」と言っていました)自らに行なったそのセルフ・バプテスマ(自己バプテスマ)は妥当性に欠けると信じるようになったからです。このため、スマイスは教会を説得し、オランダのメノナイト派に転向して真の信仰者のバプテスマを受けよう促したのでした。ヘルウィスと他の10人ほどの者たちがこれを拒みました。こうして、バプテストは自身初めて、といて最後でないのは確かですが、教会の分裂を経験したのです。バプテスト派の創始者、ジョン・スマイスは1612年に亡くなりました。メノナイトの交わりに入会を認められるのを待たずして、でした。ヘルウィスは記しています。「我らがどれほどの愛をもってしても、彼にはあまりに足らざるもので、彼が受けるにふさわしいそれからほど遠かった」<sup>3</sup>

1612年にはまた、ヘルウィスがその一群を率いて、イングランドに戻っていきます。彼らはそこで、イギリスの地に最初のバプテスト教会を創設したのでした。ロンドン市外のスピタルフィールズにです。この教会はアルミニウス<sup>(5)</sup>の神学を受け入れており、ジェネラルバプテスト<sup>(6)</sup>の教会として分類されています。普遍的な、すなわち限定のない贖罪を支持したからです。ヘルウィスの最初期の論文には次のようなタイトルがつけられており、彼らの神学の多くを物語っています。「神の御旨みむねはいかなる者に関しても 罪や断罪の申し立てにあらざること、そして すべての者がキリストによって罪を贖あがなわれること、同様にまた 乳幼児は誰一人 罪の裁きに定められざることの、神の御言葉と御業みわざとによる 簡潔にして簡明なる立証」。これらのバプテストたちは、人間の自由意志と神の恩寵おんちようとが救いの過程で相働き合うと信じていました。つまり、すべての人が救いへと潜在的に選ばれており、そのなかで 恵みと悔い改めと信仰の条件を自発的に受け入れる人々が聖徒の一員に数えられると考えたのでした。ただし、自由意志ということではまた、恩寵を受け止めた者たちが後にそれを意図して拒むこともありうることを意味しました。聖化が継続的なプロセスであるとされたゆえんです。

ジェネラルバプテストは時に、シックスプリンシプル・クリスチャン(6原理のクリスチャン)として知られたこともありました。というのは、彼らとその基本的教義をヘブライ人への手紙の6章1~2節にある6つの原理の内に見出したからです。そこにあるのは、死んだ行いの悔い改め、神への

信仰、洗バプテスマ礼、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判です〔新共同訳〕。実際、バプテスマと主しゅの晩餐ばんさんに加えて、ジェネラルバプテストは 頭に手を置くという行為を牧師や執事として按手あんしゅされる人々に対してだけでなく、バプテスマを受けた人たち全員に行ないました。このようにして、バプテスマの時点で、すべてのクリスチャンが主の働きへと「按手」されたのでした。それはすべての信仰者の祭司性（万人祭司性）を力強く象徴するものであり、キリスト者は誰もがキリストの名において主の働きに励むよう召されていることを強く示すものでした。彼らはまた、互いの足を洗うこと（洗足）を「キリストによって命じられ、祝福されたこと」として守り行ない、「同信の友たちの間に親愛の思いを育もう」としました。さらには、ヤコブの手紙 5 章 14～15 節で守られている習慣に倣って、病人に油を塗ることもしました。そして 多くの者たちが、血抜きしないままで絞め殺された動物を食べるのを、使徒言行録の 15 章 20 節に従ってしないようにしていました。

こうしたなか、これらのバプテストたちがことさらに激しかったのは、信教の自由を求める その要求においてでした。トマス・ヘルウィスの筆になるものに『不法の奥義に関する簡潔なる言明』<sup>(7)</sup> というのがありますが、これは礼拝の完全な自由を要求したもので、英語で公刊された初めてのものでした。それは良心および信教の自由<sup>(8)</sup> をすべての人に与えるよう求めるもので、王にも行政官にも宗教を裁く権限はいっさいないと断言しています。実際、ヘルウィスは、男性も女性も異端者や非信仰者であることさえ選ぶことを許されていると言い切りました。その選択に関して 人が責任を問われるのはただ神に対してのみであり、地上の権威者に対してではないということです。トマス・ヘルウィスは 1616 年、獄中で亡くなりました。自らが夢見た自由が現実となるのを、生きて目にすることのないままに。

スマイスもヘルウィスもどちらかと言えば、悲劇的な人物に見えます。そう思われませんか。彼らの神学は形を成しはしたものの、常に流動的な状態にありました。確信しうる事柄もあれば、不明なままのそれもありました。ふたりは、ある時突然に でないのは確かですが、成人の信仰者のバプテスマが必要なことを確信するようになります。それこそが聖書の中心にある教義だと感じたのでした。けれども、そうした行為をどのように執り行なったらいいのか、分かりません。ですから、彼らは即興演奏をした。すると 人々が、バプテスト（バプテスマを行なう人たち）の誕生だと言ったのでした。

神の民はいつも、神の御臨在の良き恩寵をそのようにしてつかんでいくのではないのでしょうか。確信や希望や好機を経験する予期せぬ瞬間を、そのようにして 恵みの時としてとらえていくのではないのでしょうか。

そして、それは実は、12 弟子を任命し、さらには 彼らを通じて私たち・他の者たちを任命するに際して、イエスがそこで意図されていることなのではないか。すなわち、イエスはコンティンジェンシープラン（不測の事態への対応計画）なしに 12 人を呼び出し、神の国の良き知らせ（福音）を告げ知らせようとしておられる、ということなのです。イエスは彼らを、自らの弟子として生きる それまでとは大きく異なる新たな状況<sup>(9)</sup> の中へと送り出されます。しかも、自分たちの安心安全を保証してくれそうなものすべてを投げ出すように求めて、そうされる。つまり、自分自身を無防備にし、

他の者たちの意に任せて生きようというのでした。

「あなたたちしだいだ」と、イエスは言われます。「出かけて行って、大きくなりなさい。癒やし、生き返らせ、清くし、追い払いなさい。だが、荷物の準備すらしてはならない。クレジットカードもランニングシューズも持っていくな。起こりそうなことを何から何まで予測しようなどとするな。信仰でもって生きなさい。状況がままならなくなり、大陪審<sup>(10)</sup>があなた方を起訴するようなことになっても、怖れることはない。聖霊があなた方を通り管として語ってくださる。道中、恩寵として、これを即興演奏することになる」。イエスはこのようにして、仕えることの自由を、恩寵のもたらす自由を、即興演奏することの自由を示してくださいます。それは、同じ呼びかけとして、初期のバプテストたちが応答したのもでもありました。

ただし、自由だからといって、すなわち 恵みのみで自由に生きるから、また自由に即興演奏するからといって、それは 準備や学習や奮励努力<sup>ふんれいどりよく</sup>を怠ることを意味しているわけではありません。先々に十分に備えることは、私たちには決してできないということなのです。世界中の教育をもってしても、また教義や信条を総動員しても、それでもって 即興演奏の必要な時がなくなるという保証にはとうていなりえません。人生というのは時として、どうにも備えようのない状況に私たちを追いやるものです。そうなるだろうことが前もって分かっている、です。

そのような時がやってきます、そんな瞬間が。ある暗い夜に、あるいは ある朝早くにやってきます。そのとき、皆さんは独りっきりです。そこで、それらの状況に対処することを求められる。くれぐれも注意するようにと、日曜学校（教会学校）のクラスでは一言も助言<sup>ひとこと</sup>してくれなかった状況に、です。そのとき、皆さんは緊急治療室にいるのです。今にも痛みを襲われ、たちまち何が何だか分からなくなりそうな、そんな思いでいっぱいになって。そこでは、こと細かに聖書研究をする時間などありません。精神分析を受ける時間もない。世論調査をする時間もあります。ただ、教科書やブルーブックテキスト（聖書の裏付け本文）を超えたところで すぐにも事をなす時間しかないのです。が、そうしていると、どこかしら暗闇のような深いところから 言葉が聞こえてくる、「恐れるな」と。そのとき 皆さんは、聖霊がどこか近くに臨在してくださっていることに気づきます。だからこそ、語っては行動し、即興演奏をしては これを生きるのです。自身が傷つく以上に、他の助けになることを願いつつ。

実際、イエスはしばしば、即興演奏をされました。ですよね。一人の盲人が通りすがりにいた。見えるようにしてほしいと懇願する。そこで、イエスは土と唾<sup>つば</sup>とをこねたものを作り、恵みによってその人を癒やされました。がしかし、イエスはそれを安息日<sup>あんそくび</sup>になさった。それで、宗教家たちは激怒したのでした。恩寵の即興演奏というのは時として、少しばかり不信仰に映るようです。別の時には、人々がおなかをすかせていました。が、十分な食べ物<sup>食べ物</sup>が手元にはありません。そこで、イエスは数個のパンと魚数匹とを子供から借りて、食前の祈りを<sup>ささ</sup>献げられた。すると、誰もが皆、神の恵みをまさに具体的に体験するところとなったのでした。さらに、イエスは言われます。時には 神が即興演奏されることさえある、と。王が宴会を催すものの、しかるべき客たちが顔を見せないときのように、です。王はそこで、代わりに 別の類いの、もっと見込みのある者たちを招きます。寄る辺のない者

たちや締め出された者たち、障がいのある者たちや無用とされた者たちを、です。「入りたまえ」と、王は言います。「これだけ 食べ物がある、これだけの恵みが。私はこれらを無駄にはしない」

さらには、ラザロです。ラザロは死んで、葬られています。「もしここにいてくださいましたら、主よ」と、悲嘆にくれた姉妹が言います。「私の兄弟は死ななかつたでしょうに」と。神が真実 不測の事態に備えられるとしたら、このようなことはそもそも 私たちの誰にも決して起こらないようにされることでしょう。けれども、イエスはその場におられなかつた。そこで、誤解を怖れずに言うなら、イエスは即興演奏をなさいます。そして、イエスを介して、父なる神が語られる。すると、一度は死んだラザロが墓から出てくるのでした。

恩寵を即興演奏するとは、リスクを冒すということです。一切を信仰に懸けるとということです。事はなんら恩寵でないかもしれないし、見当違いのところで見当違いの恩寵を<sup>[11]</sup> 予想してしまうかもしれないからです。

ということは、福音というのは全くもって情況による<sup>[12]</sup> ということなのでしょうか。いいえ、それはこういうことです。人生というのは、クリスチャンの人生でさえも、全くもって予測しがたいということです。そのようななか、揺るぎない確信に立つべき時や事の曖昧さを丸ごと驚づかみにすべき時を知る賢明さを手にすることができる。それが、聖霊の何たるかを物語る本質的な事柄にほかなりません。

私たちは、恵みのみによって生きるということ、ただ単に学んで知るだけではありません。時として、ただ恩寵とのみ独りあるときに、行動せねばならないことがあります。イエスは、そうされました。そして、福音の戦線に身を捧げた聖徒たちも皆、そうしてきたのでした。思い起こせば、即興演奏されてもたらされた恩寵が連禱<sup>[13]</sup> のようにして、次々と浮かんでいきます。

カトリックからもプロテスタントからも同じように火炙りにされ、溺死させられたアナバプテストたち。

そこに見るのは、信仰者のバプテスマに息づく 大胆な恩寵。

イギリスの牢獄で死に赴いた、バプテストの説教者たち。

そこに見るのは、国からの許可なしに賜った 身の程知らずの恩寵。

そして、市営のバスで場違いの所に腰かけたローザ・パークス<sup>[14]</sup>。<sup>[15]</sup>

そこに見るのは、モントゴメリー市の、アラバマ州の、そして米国の人種差別に自由をもたらしした恩寵です。

こうした主に忠実な人々のように、時に私たちは、信仰と 世に顧みられないこととの狭間<sup>はざま</sup>にあつて、自分がただ独りで 神の恵み以外に何も共になくことに気づくことがあります。そのようなときに、私たちはあるいは、即興演奏することをいつにも増して学び取るのかもしれませんが。パウロはそうした時を知っていた。それで、次のように大胆に記したのでした。「わたしたちは、四方から苦し

められても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、<sup>しいた</sup>虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされぬ。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために」（コリントの信徒への手紙二 4章7～12節。新共同訳）

というわけで、私たちの番です。誰もが土の器でしかない、この私たちの。けれども、これに増す確かな担い手<sup>[16]</sup>はいないがゆえに、そんな私たちを通して、神は時に 恩寵を明らかに示されるのです。間違いありません。遅かれ早かれ、スマイスやヘルウィスや他の聖徒たちのなにかがしかのように、私たちもまた、即興で演奏せざるをえなくなります。望み薄のなか、なおも 次のように希望を抱きつつ。しかるべき時が来たら、聖霊が私たちを介して、恩寵と善きことについて語ってくださる。それが男性であれ女性であれ、パレスティナ人であれイスラエル人であれ、世俗の人間主義者であれ世俗的な福音主義者であれ、聖霊が語りかけてくださる。それを 私たちは知ることになる、と。さあ、私たちの番です。恩寵が思わぬときに自分のもとを訪れるのを、私たちは待っています。期待しています。

それは、かつて起こったことでした。

12人の、ぼろを纏<sup>まと</sup>った弟子たちの身に。神の国を説き、聖霊の臨在を待ち受けた彼らの上に。

ジョン・スマイスとトマス・ヘルウィスの身に。オランダへと船出し、共同体の形成を願い求めた彼らの上に。

ローザ・パークスの身に。市のバスに腰かけ、自由の実現を待ち受けた彼女の上に。

そして、冷たくなったガリラヤ人の身に。借り物の墓の中で時を待つ、その方の上に。父なる神が恩寵を即興演奏されるのを待ち受ける、その方の上に。

## 注

1. レオン・マクベス『バプテストの遺産：バプテストの証しの四世紀』（ナッシュヴィル：ブロードマンプレス、1987年）、34頁〔邦訳なし〕
2. A. C. アンダーウッド『イギリスバプテストの歴史』（ロンドン：グレートブリテン・アイルランドバプテスト連合、1970年）、37頁〔邦訳なし〕
3. 同上、45頁

## 訳注

〔1〕原文をそのままに直訳すれば「<sup>おんちよう</sup>恩寵を即興演奏すること」（もしくは「恩寵の即興演奏」とでもなるが、本文の醸し出す内容的ニュアンスをより自然な含みのある日本語で表現するため、このような訳語にした。

著者のレナードはアメリカを代表するバプテスト史の専門家だが、詩的・文学的表現にも富んだ研究者で、この説教風の小論（もしくは小論風の説教）においてもその趣が随所に感じ取れる。

なお、読者に語りかけるような原著の趣を大切にするため、以下の訳文は「です・ます調」で訳出した。ただし、訳注は通常の「だ・である調」で記してある。

[2] [ ] 書きは、訳者の挿入。以下同。

[3] オランダ東インド会社の船員のためにパンを焼いて販売していた。東インド会社とは、当時、インドを拠点にしてアジアへの進出を図っていたヨーロッパ諸国がそれぞれに設立した、貿易と植民地事業のための会社。製パン所はこのときすでにオランダ東インド会社の手を離れていたが、これを買い取った所有者が同様の事業を行っていた。東インド会社製パン所ではなく東インド製パン所となっているのは、このためである。

[4] 以下の引用文は、厳密には、彼らの知人が彼らから聞き受けた報告として記録に残したものである。著者はこれを踏まえたうえで、「彼ら自身の記録」と言っている。そうした趣旨を勘案し、訳文は、彼ら自身の報告というニュアンスが感じ取れるような訳出にしてある。

[5] オランダの神学者（1560～1609年）。カルヴァン主義に立つ改革派教会に属していたが、後にその予定論的教義に異を唱え、<sup>ふへんしよくざいろん</sup>普遍贖罪論を展開した。

[6] バプテスト派の歴史は、主として2つの流れに大別される。一つは「ジェネラルバプテスト（普遍バプテスト）」のそれで、キリストの贖罪はすべての人に及んでいるとする立場。あと一つは「パティキュラーバプテスト（特定バプテスト）」のそれで、限られた人々のみが贖罪にあずかり、救われるとする立場である。上記[5]記述のアルミニウスの神学を採用したスピタルフィールズの教会はそれゆえ 普遍贖罪論を奉じ、これがため、ジェネラルバプテストに分類されているというのが著者の説明である。

なお、普遍贖罪と普遍救済とが区別なく同義・互換的に用いられる向きもあるが、「贖罪」が即そのまま「救済」になるとはかぎらず、ジェネラル＝パティキュラーの議論にあたっては これら両者の吟味検討が必要になる。

[7] 邦訳書名の前半「不法の奥義」は、新約聖書 テサロニケの信徒への手紙二の2章7節より。<sup>きんていやく</sup>欽定訳聖書（KJV, 1611）では "the mysterie of iniquitie"。ただし、その意味するところについては諸論があり、訳語にも微妙な相違が見られる。原語のギリシア語は "τὸ μυστήριον τῆς ἀνομίας" だが、英訳の新改訂標準訳聖書（NRSV）はこれを直訳して、"the mystery of lawlessness" と訳出。邦訳では、文語訳と新改訳が「不法の秘密」との、口語訳と新共同訳が「不法の秘密の力」との訳語を採用する一方、いわゆる岩波訳では「無法の奥義」という表現がこれに当てられている。本訳では、聖書本文における前後の文脈展開とヘルウィスのその解釈手法とを合わせ考え、これを「不法の奥義」と訳出した。ちなみに、この語を含む一文全体は、岩波訳では「事実、無法の奥義は今すでに実行に移されている」と訳されている。

ヘルウィスはこの書において、イングランド国教会や国王をはじめ、さらには反国教会派に対してさえも 各種の批判を展開。帰国前のアムステルダムでこれを執筆、印刷し、帰国後の1612年、献

辞を書き添えて、イングランド国王 ジェームズ1世に献上している。

〔8〕"freedom of conscience" は時に「良心の自由」と、また時に「信教の自由」と訳されたりするが、欧米における元来の意味合いは倫理と宗教の双方における自由で、それらの両方を意味している。

〔9〕イギリスの小説家、オールダス・ハクスリーの作品『すばらしい新世界 (*Brave New World*)』(1932年。邦訳あり)が背景にある。小説自体は逆ユートピアの未来社会を描いた創作だが、これを小文字で "brave new world" と表わすと、「従来と大きく異なる新たな情況」を意味する表現となる。ここではその意で用いられている。

〔10〕アメリカの司法制度で、刑事事件において起訴の有無を決定する陪審。

〔11〕原文は "the wrong kind of grace in the wrong kind of place" で、「グレイス (恩寵)」と「プレイス (ところ)」の両語で韻が踏まれている。邦訳でこの「韻の妙」を表現できないのは残念である。

〔12〕原文は "absolutely relative" で、直訳すると「絶対的に相対的」。「絶対」と「相対」という反意語を巧みに用いて表現したもので、欧米の言語文化に生きる人々には「組み合わせの妙」が実感として伝わる。上記〔11〕の「韻の妙」も含め、著者レナードのこうした言語センスの妙は本小論の他の箇所にも散見される。

なお、この部分の訳出にあたっては、直訳では少々分かりにくいので、「相対的」の意味するところを文脈に即して説明的に叙述した。

〔13〕カトリック教会の祈禱形式で、司祭の唱える祈りに、会衆が定型の祈願文で応唱。そのようにして、司祭と会衆が交互に連続して、祈りを交わす。英国国教会では「嘆願」と呼んで、同様の祈禱を行なっている。

〔14〕「アメリカ公民権運動の母」と呼ばれる黒人女性。

1955年12月1日、アメリカ・アラバマ州のモントゴメリーに暮らすローザ・パークスは仕事を終えた帰路、市営のバスに乗車。バスは当時、座席が白人席、黒人席と、その間の両用席に分けられていた。黒人席に空きがなかったパークスは中間の両用席に座っていたが、白人の乗客が増え始めたのを受け、運転手が彼女に席を立つよう指示。これを拒んだパークスに、運転手は「立たないなら、警察を呼んで逮捕させるぞ」と告げたのだった。こうしてローザ・パークスの逮捕となるが、この事件を機にキング牧師らを中心とする「モントゴメリー・バスボイコット運動」が始まり、ついには1956年、公共交通機関における人種差別禁止の連邦最高裁判決を勝ち取ることになる。全米各地に広がった公民権運動の進展は、モントゴメリーにおけるこの運動が大きな契機になったことは周知のとおりである。

公民権法は1964年に成立している。

〔15〕この一文にも、著者レナードの言葉使いの妙が見て取れる。すなわち、「(場違いの所に) 腰かけたローザ・パークス」の部分の原文は "Rosa Parks parking herself (in the wrong place)" で、



"Parks (パークス)" と "parking (パーキング)" が合わせ言葉になっており、かつ 韻を踏んだものともなっている。

〔16〕著者はここで、"stable constituency" という表現を使っている。これは選挙関連の表現で、有権者の いわゆる「浮動層」に対して、「安定層」「固定層」「不動層」とでも言うべき人々を意味している。レナード得意の比喩的表現の一つだが、直訳では意味が分かりにくいいため、理解のしやすいように訳出した。

### 主要参考文献

〔アイウエオ順〕

アンダーウッド、A. C. 『イギリスバプテストの歴史』 ロンドン：グレートブリテン・アイルランドバプテスト連合、1970年〔邦訳なし〕

タル、ジェームズ・E. 『バプテストの思想を形成した人々』 ヴァリーフォージ：ジャドソンプレス、1972年〔邦訳なし〕

デクスター、ヘンリー・マーティン 『ジョン・スマイス<sup>せいでん</sup>正伝』 ボストン：リー・アンド・シェパード、1982年〔邦訳なし〕

バージェス、ウォルター・H. 『自己バプテストの祖、ジョン・スマイスと、トマス・ヘルウィス、そして イングランドにおける最初のバプテスト教会』 ロンドン：ジェームズ・クラーク・アンド・カンパニー、1911年〔邦訳なし〕

マクベス、レオン 『バプテストの遺産：バプテストの証しの四世紀』 ナッシュヴィル：ブロードマンプレス、1987年〔邦訳なし〕

(矢野 眞実訳)